

中国の江南古鎮観光に関する研究

根橋 正一

はじめに

現代中国における観光ブームとも呼べるような状況についての調査研究の試みの中で、われわれが最初に注目したのは古鎮や古城、古村といった古き中国の伝統的な街や村へのノスタルジックな観光地の台頭である。なかでも江南古鎮観光の一番手として注目されていた周荘であった。2003年学術振興会の科学研究費補助を得て行われた調査研究に際して、われわれの最初の周荘調査が敢行された。そのときにはわれわれ研究チームのほか上海社会科学院社会学研究所の徐安琪教授とともに現地を訪問し、周荘観光会社にて聞き取り調査を行ったほか、上海市内では中国大手の観光旅行社において周荘観光関連の聞き取り調査をおこなった。そして翌2005年9月には流通経済大学社会学部国際観光学科の科目である観光研修の研修先を周荘として、学生たちとともに再訪することになった。学生たちとの現地調査は周荘観光会社および周荘鎮政府での聞き取り調査と観光地内土産物調査をおこない、初歩的ではあるがいくつかの実証的なデータを入手することができた。また、このときには短時間ではあるが烏鎮をも訪れ若干のデータを手にすることができた。本報告はこのときの学生たちが行った調査データおよび科研調査を中心に報告する。さらに2006年9月にも「観光研修」科目の社会調査の一環として周荘調査を行うことができたが、このデータに関しては現在学生たちが調査報告書を執筆中なので本稿では言及しない。

われわれがなぜ周荘観光地を題材にしたのか、どのような問題を設定し、どのような調査を行ってきたかについて述べておかなければならない。

かつて中国が社会主義を強調した時期、すなわち中国共産党による解放（1949年）から文化大革命（文革）時期と呼ばれる時期には現在の観光概念とはまったく異なる旅行が行われていた⁽¹⁾。旅行の意義として特に強調されていたのは教育的機能であった。それは革命の故地を訪ね、革命先達の故郷やゆかりの地を訪れて、革命についての認識

を深め、革命の後継者となる決意をさらに強固なものにし、さらに新たな社会建設に向かわせる意識を培うことこそが、旅行を意義付けるものであった。レジャーや観光とは異なる革命教育旅行とでも呼ぶべきものであった。またその他旅行の多くは仕事の都合で出張したり会議のために出かけたりといった機会に名物や古い町を訪れる、あるいは離れて暮らす家族や親族を訪ねる「探親」と呼ばれる旅行が主流であった。政策や社会が文革の時代から改革開放の時代へ変化するなかで、観光が人びとの娯楽やレジャーとして注目され、経済活動、産業活動として認識されるようになっていくのが1980年代後半のことであった。すなわちこの頃革命教育旅行から観光旅行への転換が発生したのである。観光を町おこし、町の経済的発展の主要な産業として開発を行った先駆的な試みを行ったのが江蘇省昆山市周荘鎮であった。周荘は古い歴史をもち中国において最も豊かな地であり、中国人にとって古きよき時代の象徴である江南の都市風景を観光資源として、それまでには考えられなかった観光「郷鎮企業」を興して観光産業を中心とする開発を行ったのである。その後中国には観光ブームといえるような状況が発生し、周荘はその波を最初に捕らえるのに成功した。

このような周荘に関するわれわれの関心は、現代中国の観光を理解するうえでも、また現代中国社会の動向を分析するためにも極めて興味深いデータを提供してくれるという確信から出発していた。本稿では、周荘観光会社における2004年のインタビュー記録、2005年の周荘鎮政府インタビュー記録、2005年の周荘および烏鎮における土産物屋調査のデータを示し、最後に古鎮観光に対する観光のまなざしに着目して都市ツーリストのノスタルジヤ的観光のまなざしに関する若干の議論を紹介する。

1. 観光会社インタビュー

周荘観光会社に対する聞き取り調査は2004年と2005年の2回にわたって行った。2004年は科学研究費補助研究にともなう調査においてであった。これは周荘に対して最初のアプローチになった聞き取りで、初歩的な概況などの説明を受けた⁽²⁾。

2004年9月9日、11時より、周荘観光会社

質問：周荘および貴社の概要からお話ください。

回答：周荘は行政的には江蘇省昆山市に属していて、地理的には江蘇省の最も東南部に位置し、上海市と接している。辺鄙な場所にあり、湖に囲まれた不便な場所に位置している。道路が周囲の都市と繋がったのは1984年以降である。保存区域である古鎮観光のエリア面積は0.47平方キロメートルで、それほど広いとはいえない。観光会社は1980年代に発足した。江蘇省内初めての観光サービスを主とした郷鎮企業として出発した企業である。当時は全国的に郷鎮企業によって地域開発経済発展を目指しておびたしい数

の郷鎮企業が興された時期であるが、観光産業企業は前例がなかった。初代の総経理がこの町の古い建物に注目し、それらを保護したいと考えて観光化を発案したのがこの企業設立のきっかけであった。当初は改革開放時期に突入した時期であり、周荘鎮レベルから昆山市、江蘇省レベルに至るまでどこにも古い建物や街並みを保護して、観光資源にして観光開発を行おうという考えもなかったし、産業として成立する可能性を考えるものはいなかった。そんななかで初代の総経理は、この一連の考えを実現する必要を認識し活動し4万元の資金を準備して事業に取り掛かった。初代総経理はもともと鎮政府の文化処(站)の長を担任しており、江蘇省の文化部門に働きかけ資金を調達したのである。

現在の沈庁の場所には当時、別の郷鎮企業があつて物を生産していたが、これを撤去させ保護すべき建築物として、修理した。これが最初の観光ポイントになったが、当時の入場料は0.6元であった。これがきっかけとなって観光鎮への歩みが始まり、他の建物も修理保護の対象として、観光資源として姿を整え観光開発が進んで行った。

10数年の時間をかけて鎮全体の観光資源化、観光化が進んだ。1998年郷鎮企業は周荘旅行会社という集団企業へと姿を変えた。このときの資本金は3000万元になっていた。このとき以来周荘観光の高度発展期に入る。以後毎年会社の利益の伸長率は20%以上であった。発展はしたが問題は残っていたし、さらに次々と新たな問題も発生した。企業として発展し、大きくなると管理上の問題が発生した。特に、企業として発展はしても、郷鎮企業以来の態勢として郷あるいは鎮政府に所属し、指導を受ける立場にあるので、企業としての活動と政府の政策との間で矛盾が生ずることもあった。そこで集団企業をさらに、所有改革をもおこない、投資している4社が持ち株をもつ企業として政府からの自立の方策を採った。そしてさらに現在は株式会社の法人化の手続きをとっている。株式会社化はほとんど最終段階になっているが、それが完了した場合でも持ち株比率は政府が所有権を持つ周荘の不動産を現物として投資していることになり、政府の役割はまだ大きいのが現状である。周荘観光地の管理は住民個人への管理と密接に繋がっており、政府の役割は経営ばかりでなく日常的な役割を持っているのである。金銭的な投資部分は4社が負担している。株式会社化実現に続く次の目標、課題は株式の上場であるが、その手続きもほぼ終えている。現在の会社は資本金1億元を擁する会社に成長している。

質問：会社の組織と事業内容、収入について教えてください。

回答：会社としての主な収入源は①入場料収入で管理部門が扱っている、②遊覧船管理部門が扱う遊覧船収入、水郷観光の目玉として遊覧体験は重要である。③沈庁のレストラン収入はレストラン管理部門が扱っている、④ガイド管理部門のガイド料収入、⑤民家を利用した宿泊収入、民宿のようにかつての水郷古鎮の生活を体験することができる。

質問：会社も観光産業も成功してきましたが、次にはどのようなことを目標としていますか。

回答：周荘に留まらず、地域的に関連している周辺都市に拡大して、周荘の観光スポットと連携して産業転換を図ることも次の課題である。地域的にも幅広い観光産業化の可能性を本格的に考えて行くことが大切である。他の地域にも周荘の成功の経験を紹介し、地域産業育成の方法として観光産業を広め、他の鎮とも共同して国際的な観光地の形成を進め有名にしたい。現在はまだ単一の古鎮観光として認識されているのみだが、さらに広いレジャー産業として、ここに宿泊してもらい本当の水郷の良さを体験し、その雰囲気を楽しんでもらい、更なる観光収入の増加を目指したい。

質問：会社の事業についてももう少し話してください。どの程度の従業員がいるのですか。

回答：現在周荘の人口は2万2千人ほどですが、鎮のGDPは約10億元で前年度比17.5%増、1人あたり7060円で前年度比12.1%増というのが現状である。周荘鎮は辺鄙なところに位置していて、他業種の企業を誘致するのは困難であったため、観光産業収入が鎮の全収入の70%を占めている。これ以外に可能性はない。鎮の本観光会社従業員は350人程度。遊覧船を操っているのは従業員ではなく下請けということになる。彼らは150人程度で、300~400艘のボートを扱っている。人力車もあるが、彼らも当社の従業員ではない。

質問：初代総経理について詳しく教えてください。

回答：もともと鎮政府の文化駅の長を担当していたので、省の文化部門とのパイプがありそこへの働きかけによって最初の資本金を捻出することができた。彼女は古い建築物を保護保存して観光資源とする構想を持っていたが、他の地域ではそのようなことを考える人もいなかったので省政府も驚きながらもこの構想を支援することになった。彼女の考えは当時、時代を超えた発想であったといえる。1986年総経理は上海の同済大学の教授を招いて周荘観光化の計画立案をおこなった。教授の提案は16字方針となっている。「保護古鎮、建設新区、発展旅遊、振興経済」である。

観光資源として周荘に存在するのは、特徴ある風景、すなわち多くの川、14の古い橋、川や橋の両側に立ち並ぶ民家である。橋・川・家、この三要素が揃って江南古鎮、水郷の風景、景観となっている。もうひとつの特徴は江南建築の風情を残す特徴的な家屋である。川に面して、前は店、後ろは自宅といった特徴を持つ建物が周荘の典型的な街並みを構成している。また、周荘の文化的歴史は長い。5~6千年前にすでにこの地には人が住んでいた遺跡があるし、紀元前200年頃には文字に刻まれた歴史がある。有名な文人や商人も数多く排出している。とくに明代初期の沈万三は江南屈指の豪商で現在においても第1の観光ポイントである沈庁の主である。典型的な水郷の自然から生まれた民族風情もある。すなわち、独特な生活習慣、服装など水郷の情緒が色濃く現れている。

初代総経理以来、開発しながら伝統的な文物の保護に力を尽くしてきた。学校所有の

企業が使用していた古建築，村営工場が操業していた建物などを接収して，保護保存し，新区に移築し，観光資源としてきた。いくつもの改修工事を敢行して昔ながらの形に戻すための投資に1000万元を費やしたほか，近代的な電線を埋設する工事，下水道処理工事には3000万元を費やして下水道処理工場を建設した。これらの工事は，全体の景色との調和を大切に，すべてかつての形式，建築様式でおこなった。

こうした努力は社会的に認められ，2001年には国際連合から人の住む環境が最も優れた街優秀賞，2003年には国連アジア太平洋地域世界文化遺産賞，同年全国歴史文化鎮に推挙され，国家建設部門から表彰された。これらの賞はこれまでのわれわれの仕事に対する評価と受け止めており，これからもさらに保護の責任を痛感している。

一方で，開発と保護の間には矛盾，開発を望む個人の利益と保護の必要を強調する周荘全体としての利益との矛盾が発生がする。住民は自由に便利に生活する当然の権利を持っている。例えば住民はエアコンなどの近代的な電化製品を使用して快適に暮らすことを望んでいるし，それは当然の権利である。しかし，古鎮景観を観光資源としている鎮としてはエアコンの室外機のある風景は認めがたいということになる。悩み，検討した結果，室外機が眼に留まりにくい工夫をすることになった。周荘の民家は以前と変わらず住民が生活している建物がほとんどを占めているが，住民の中には観光に関わっている者もあれば，そうでない人もいる，自営業をいとなむ者も無関係な人もいて利害が対立し矛盾が発生することもある。鎮政府の住民保護弁公室が調整に当たる。そんななかで古い建物に居住していたる人のなかには，郊外の新しい居住地域に引っ越す者も増加している。かつての住居は観光関連の商売をする人に貸し出したり，譲渡したりしているのである。

質問：周荘を訪れる観光者数を教えてください。

回答：1995年約40万人，2000年150万人，2001年208万人，2002年263万人，2003年184万人であった。2003年激減したのはサーズの影響である。2004年は2002年度並みに回復すると予想している。外国人観光客の割合は統計をとっていないので明確ではないが約10%程度だと考えている。入場料ほかの売上金は2002年で約1億元，税金は211万元で全額地方税であり，国税は払っていない。現在地代は1平方メートル当たり1万元ほど。

質問：鎮の宿泊施設はどのくらいありますか。

回答：鎮全体の状況はわからない。

2. 鎮政府インタビュー

2005年9月観光研修に際して周荘鎮政府への聞き取りを申し込んだところ，副鎮長が対応してくれることとなり，学生たちは緊張した面持ちでインタビューに望んだ。インタビューは中国人留学生の通訳をはさんで，学生たち自身が行ったものである⁽³⁾。

2005年9月8日 9:00, 昆山市周莊鎮人民政府役副鎮長 翁志成氏

質問：観光で周莊が成功しているので聞きにきた。周莊の観光地としての成功の過程および現状について説明してください。

回答：産業が必要になり、人口や産業構造が変化する。周莊は中国第一の水郷である。

周莊は江蘇省昆山市の南部、周莊の東は上海、西は蘇州、南は浙江省に接している。現在は交通の便はよく周莊から北に35キロには蘇州から上海への蘇滬高速道路、国道312号線が走っている。また水路としては中国の歴史上有名な京杭運河がある。上海の浦東国際空港からは1.5時間、江蘇空港へは1時間で繋がっている。人口は2万2千人。鎮の面積は3900平方キロメートル。周莊は歴史が長く伝統があり、周囲は蘇州や杭州など素晴らしい都市に囲まれている。

周莊は1086年から900年の歴史をもち、有名人を数多く輩出している。現在でも900年前のものが残っている文物も多く、鎮内の60%の建築物が明清代をはじめとする古建築である。江南の水郷を代表する鎮であるばかりでなく、中国の歴史文化の代表といえる。有名な文化人に愛されてきた周莊は、1950年代から中国の有名古鎮であった。中国は歴史を持っている古い街が数多く存在しているが、国内でも最も美しい町のひとつといえる。周莊は世界文化遺産登録を目指して2001年ホテルの船の中で会をおこなったが、登録はされなかった。しかし、これまで中国第一の古鎮として世界的にも認められ有名な中国伝統的な都市として多くの人びとに愛されている。国内外からの有名人を含む多くの客人が訪れている。なかでも2001年には、中国の国家主席江沢民がアメリカ大統領をともなって周莊へ来た。1996年以来10回にわたって世界旅行文化祭を実施して、国際観光事業を展開している。

現在の周莊の経済に関しては主に3つの顕著なポイントがある。すなわち、①観光関連事業 ②中国の科学 ③個人企業である。

①2005年7月までの鎮の総所得は10.8億元。6月までの海外からの旅行者は120万人あり、周莊の旅行収入は7億元に達している。

②2004年から江蘇省周莊での産業技術関連の合資企業は35社ある。35社のIT産業生産は全国の60%を占めている。中国政府科学部からの国家投資をはじめ国内外からの投資が行われて高科学分野の産業が発展しているほか、2004年には江蘇省の産業技術専門学校が国内最初のケースとして発足した。

③国内外からの私的企業の進出も活発である。

質問：周莊が現代の観光地として発展するまでの歴史の過程についてご説明ください。

回答：900年前の1086年頃まで、すなわち元と明の間には真豊里と呼ばれていた。その頃に周迪公がこの地に土地を求めて開発した。彼にちなんで周莊の名前がついた。明末期には沈万三が現れて、京杭運河を活用して米や絹の流通商業に成功し、財を成した。周莊の歴史には欠かすことのできない人物である。また、「魚米の里」周莊は豊かな町と

して発展した。

解放後、行政的には「郷」であったが、1986年「鎮」に昇格した。この頃から観光開発に着手し、1992年までの6年間をかけて観光地に変身した。昔は田舎だったが、現在では観光都市として大いに発展してきた。

質問：鎮政府の仕事や役割についてお話しください。周荘観光会社との関係についても教えてください。

回答：鎮政府は、経済と社会の発展の機関であり、周荘観光会社とは一線を画している。最初は鎮政府が観光開発のために働いたが、周荘の観光収入のために観光会社を設立し、先年株式会社化した。鎮政府の職員は40人いるが、観光関連の部門は一人だけである。担当者は観光関連の管理の仕事をしており、党代表の書記でもある。鎮内で観光関連の仕事に従事している人は500人程度である。

質問：周荘の人口について教えてください。

回答：人民政府の担当する仕事は工業、農業、交通、ガス、電力、福祉などの部面である。人口は2万2千人、男女比は半々で、1986年から現在まで人口の大きな変化はない。1986年以前は観光開発が始まるまで人口は減少していたが、それ以後は外地人が入ってきて人口は増加してきた。以前、多くの若者は学校を卒業すると昆山市の集団企業に就職口を求めて鎮を出て行った。1986年以降では1000人くらい昆山市に行った。逆に転入した外地人は約5200人、そのうち蘇北地域など江蘇省内からは40%の2400人程度である。湖南省や四川省・陝西省などの他地域からの転入者は2200人くらいである。

流入者のうち、観光関係の職業に従事している人は1000から1500人程度である。観光関連の職種としては、江蘇省内の宜興の紫砂陶器関係者、蘇州からの刺繍関係者、揚州からの画家、太湖畔無錫の真珠関係者などの観光土産の製造販売に携わっている人びとである。周荘には江南土産の80%が揃っている。観光関連の従事者たちの家族構成についてみると、家族全員でやって来て商売をしているケースは少ない。一人もしくは配偶者と2人で来ている人が多い。子供は出身地で実家の父母が面倒を見ているのである。子供をつれてきているのは20%程度である。

質問：観光産業など産業の状況について教えてください。

回答：1986年以来「保護古鎮、建設新区、発展旅遊、振興経済」という16字方針を採っており、積極的な経済開発を推進している。産業別収入状況は次のようになっている。2000年には第1位観光業55%、第2位工業38%、第3位農業10%、であったが2004年には観光業45%、工業45%、農業10%となっており、順位は変わらないがその占める重要度において工業部門の伸張が著しい。

観光産業開発の目的については2点を考えている。すなわち、周荘の人の生活のために観光産業開発、および社会発展のためである。1986年以前、1年の収入が700元程度であったが、2004年には、14倍以上の8650元へと急増した。周荘の人びとの生活を豊に

するために観光産業の果たした役割は大きい。次に社会発展に眼を向ければ、1986年以前は道路もなく昆山市まで船で4時間、上海まで7時間もかかったし、電気もなかった。上海に近い街には電灯も来ていたが周荘は電気のない昔ながらの生活が1986年まで続いていた。しかし、道路網が完成した現在では昆山や蘇州まで30分で行けるようになったので便利になった。これも観光産業をはじめとする産業発展の成果である。1986年当時昆山市内には20の郷があったが、周荘はその最貧の郷であった。産業構造に関しても、1986年以前の人口22000人のうち19000人は農業従事者で、1人あたりの耕作面積は660平方キロメートルにすぎなかった。鎮の全収入の75%が農業収入であった。当時、工業としては昆山市が投資した機器工場と造船所の2企業があっただけであった。86年以降の観光産業の開発は周荘にとって画期的な転換点であった。

質問：観光開発以降の周荘出身者および外地人はどのような生活をしていますか。何か特徴があつたら教えてください。

回答：当地出身者も外来者も自営業者が増加している。当地出身者は飲食店や茶館、日常生活用品を扱う商店を経営している。また、不動産業や流通業に従事して成功している者もいる。自分で経営できない老人たちは旧来の自宅を外来者や商売をする人たちに貸与あるいは譲渡して、自分では郊外の新築アパートで生活しているものも多い。外来者は江蘇省の南京・蘇州・昆山、上海市からの投資とともにやって来た人びとで、ほとんどは観光関連産業に従事している。周荘の資本の80%はこれらの都市からの投資である。外来者のうち蘇北出身者を中心とした1万人は観光関連であるが、残りの1万人は工場労働者で、年収約1万元である。観光関連産業従事者より収入は若干少なめである。不動産業は上海資本が60%を占めている。工業では日本・アメリカ・台湾・香港・上海や新疆からの進出企業が多く、ほとんどはIT関連企業である。ホテルへ投資している企業は上海資本が多く、60%を占めている。例えば、周荘賓館は60%が上海資本であり、三牛賓館はもともと上海資本であったが後に昆山市が買収して経営している。

質問：周荘鎮の人口構成について教えてください。

回答：年齢構成は、18歳未満25%、18～40歳45%、41～60歳15%、61歳以上15%である。これを1986年と比較すると18歳～40歳が20%程度であった点の特徴的である。その後の外来者の増加などにより労働人口が増加したのである。子供の数も増加したが、これは観光産業に従事するために外地から家族でやって来た増加分である。地元の子供の数にはあまり変化はない。子供たちは18歳で高校を卒業すると昆山などへ職を求めて出て行くケースも多いが、観光産業が盛んになってからは地元に残る者もいる。周荘鎮には小学校1校、中学校1校があるが高校はないので、高校生は10キロメートル離れた昆山の高校に通っている。1980年以前には地元で高校があったがそれ以後廃止された。現在では、交通の便も改善されたので通学が可能になっている。老人や若者、女性や結婚した婦人も、三輪タクシーや観光船の船頭さん、ホテルの掃除など観光に関連した職業につ

き、700名程度が外部に稼ぎに出かけず鎮内に留まっている。

鎮政府の副鎮長は観光開発以来の周荘鎮の変化について肯定的な評価を強調しつつ語ってくれた。

周荘が観光によって近代化する契機となったのは自動車道路が開通したことであり、鎮政府関係者も住民も何度となく強調する。道路が開通して自動車が始めて周荘にやってきたのは1986年であった。1980年代後半になるまで周荘には道路は通じていなかった。私の手元に1979年発行の中国交通図という地図があり、これには周荘の地名は記載されているが上海の青浦や江蘇省側への水路はあるが、道路はどこにも繋がっていない。現地の人のお話のなかにも道路がなく長い間水路だけで外部と繋がっていた時代の思い出がよく出てくる。毎朝、蘇州や昆山に定期船が出て買い物や用足しに行った。しかし、夜子供が病気になったりすると、朝の定期船まで待たなくてはならずとても大変だった。このようなつらいエピソードを語る婦人も多い。船だけが町の外との交通手段であった。

3. 土産店調査

中国の観光地の特徴としてみられるのは、商業集積地としての外観である⁽⁴⁾。観光地としても見ものや名物、観光資源を覆い隠すような土産店の林立に圧倒されるのである。周荘や他の古鎮観光地においても例外ではなく、古い江南の古きよき時代の街並みやたたずまいこそが観光資源であり、観光者の見るべきものであるはずが、通路に面した家々はすべて土産店に改装され各種のみやげ物があふれているのである。そこにかつての家並みがあり伝統的な生活があったことこそが観光の目的とする景観であるはずが、生活していた家々は壁ははずされ、入り口には商品棚が置かれていて生活の様子は想像することさえできなくなっているのである。

表1は2005年学生たちがランダムにインタビューして得たデータであるが、ランダムとはいえ周荘観光地内の土産物店のイメージを映しているといえる。

表1 周莊みやげ店聞き取り調査結果 (2005年9月)

番号	扱ひ品目	店長姓	店長年齢	出身地	学歴	創業年	従業員	特徴
1	真珠・真珠粉							
2	刺繍			本地人		2001		蘇州の工場生産
3	篆刻			山東人		2000		10年やっている
4	子ども靴	夫婦		江蘇				
5	貞豊土布			本地人				糸からすべて手作り
6	坊器木作園			本地人		1995		
7	紫砂			宜興				宜興正宗紫砂廠直売所 派遣職員
8	服飾			本地人		1997		隣は夫が経営する店
9	万三	呉 女	40代	本地人	3	1999	2人(家族)	
10	真珠・真珠粉	趙 男	20歳	蘇州	2		2人(親戚)	
11	万三	李 女	30代	本地人		1999	2人(家族)	
12	玉龍書画	徐 男	67歳	常熟人		1995	3人(家族)	
13	真珠	呉 女	50歳	蘇州		2005	なし	開業3日目
14	藍染木綿	呉 女	20-30歳	本地人		2003	2人(家族)	
15	絵画	徐 男	42歳	常熟人		1995	2人(家族)	東方芸術大学で絵画を学んだ息子の中国伝統水墨画を売っている
16	万三	朱 男	30歳	本地人		2000	2人(家族)	
17	陶器紫砂	莫 女	40歳	宜興人		1995		
18	真珠	黄 男		本地人		1991	2人	
19	刺繍	鄭 女	20代	蘇州		1985	5人(雇員)	
20	刺繍	女	30歳	蘇州		2000		
21	革製品	徐 男	42歳	上海人		1992	2人(雇員)	
22	紫砂	許 男	40歳	宜興人		1998	2人(家族)	
23	沈疔味香齋	徐 女	20代	本地人		1992	5人(家族)	
24	藍染	文 女	30代	浙江人		2002		手作り手染め
25	土布	女	74歳	揚州人		2001	2人(雇員)	
26	刺繍	謝 女	42歳	蘇州	中卒	2000	1人(夫)	先祖伝来の技術
27	葦絵	計 女	38歳	蘇州	高校	2002	1人(夫)	沙家浜で学んだ技術 非伝統的
28	真珠	王 女	30歳	蘇州	中卒	2001	本人のみ	太湖から仕入れる
29	銅絵・銅飾り	封 女	42歳	黒龍江省	中卒	2000	1人(夫)	青銅・黄銅の飾り物・ドア・科技・魔よけ
30	石飾り太湖石	李 女	33歳	蘇州	中卒	2000	1人(夫)	
31	紫砂	顧 男	34歳	宜興人	高校	2000	1人(妻)	周莊紫砂工芸社 紫砂・朱泥・黄泥で製作

現地特産物土産としては、名物となっている豚足を煮込んだ万三蹄をはじめ土布（手作り木綿製品）、真綿布団、藍染製品などがあるが、いずれも伝統的な社会では自給自足的に製造消費されていたものであるし、かつては鎮の中心的な産業あるいは副業産品として生産されていたものではあった。しかし、現在は周荘ではまったく生産されてはいない。すでに周荘および周辺の農地エリアは急激に進出してきたIT産業など近代的な諸産業によって工業地域に変化しており農業や副業生産のための空間は皆無の状態にあるのである。木綿にしても真綿にしても、さらに漁業産品にしても現在ではすべてが他都市からの仕入れに頼っている。

江南イメージに繋がっている江蘇省内の産物としては、蘇州の絹製品や刺繍工芸品、宜昌の陶器（紫砂焼き）、太湖の真珠などのほか、江南の風景を題材とした絵画や葦絵などを描きながら土産品とする人びともいる。

さらに遠方から観光ホストとして観光地を賑わしている手工芸品を土産とする人びともいる。河北省の内画家、山東出身の篆刻家などがいる。

これらの人びとは観光土産生産ネットワークを背景としながら観光土産を経営し観光地を賑わしている。

次に同じ2005年に観光研修の学生による浙江省烏鎮における同様の調査結果を示した（表2）。周荘より一足遅れて観光地化した烏鎮は土産物店に関しても本地人優先の方針を採っているが、本データでも経営者の出身地は現地が多く、外地人でも浙江省や同じ江南のイメージが強い江蘇省出身者となっている。現地経済、現地人の経済活動を活性化するための観光開発という方針がこの表からも理解される。

宋代から始まったといわれる江南の都市形成の歴史が、流通産業や商業・木綿産業・絹産業・食品産業・陶器産業・各種工芸品産業などによる都市形成過程であるとするならば、現代の観光産業による都市形成の歴史の一つのパターンをここに見られるということもできよう。観光産業を中心とする新たな都市形成の過程をわれわれは語り始めることができるかもしれないのである。

表2 烏鎮 土産物店調査 (2005年9月)

番号	扱い品目	店長性別	店長年齢	出身地	学歴	創業年	従業員	
1	手作り宝剣・盆	黄 男	68	本地人		1990	息子	杉材使用 自作作品 技術は師に習った
2	三白酒	呉 男	50代	本地人		2000	8人	100年以上の歴史ある酒
3	藍染	朱 女	60代	本地人		1965	1人	
4	藍染	王 女	50代	本地人		1990	夫婦経営	手工芸品工場から仕入れる
5	刺繍	男	30代	蘇州		2005	3人	伝統的手作り品
6	藍染 靴 服飾	沈 女	33歳	本地人	中学校	2001	3人 親戚	伝統的手工芸品 店員28人 うち福建河北から2人
7	麦芽糖			本地人		2001		伝統的なお菓子
8	麦芽糖			本地人				100年以上の歴史 烏鎮内に工場がある
9	蚕絹被	男		本地人				江南特産品 烏鎮内に自分の工場がある
10	染め綿布	女		本地人				工房がある
11	蘇州刺	女		蘇州				
12	絹製品	女		浙江台州		2005		蘇州から仕入れ 半年前家族でここに来
13	布靴	愈 女	47歳	本地人	小学校	2000	1人	靴底は郷で作っている、靴は自分で作る
14	印染店	許 女	40歳	本地人	小学校	2004	2人 家族	
15	服装	許 女	40歳	本地人	小学校	2004		サンプル16と同一人物が2店経営
16	緑荷飯	沈 女	24歳	本地人	大専	2001	2人バイト	大専 (行政管理)
17	字画店	男	24歳	本地人	高中	2000	1人	手作り切り紙 江南水郷風景画 伝統手工

4. 都市ツーリストとノスタルジヤ的観光のまなざし

われわれは現代中国観光の現場である周荘の調査を行い、そのデータからいくつかの知見を得ることができたが、つぎにこの観光地がなぜ観光者・ツーリストを顧客としてひきつけることに成功したのかの分析に向かわなければならない。いくら売り物の観光資源を確保し顧客受け入れの準備をしても客が足を向けなければ、客にその欲求や意識がなければ観光地として成功することはないからである。そこで、われわれ科研調査グループの調査は、観光客の出てくる大きなマーケットである巨大都市上海に住む人びとの観光意識や観光行動の調査へと進むことになった。

改革開放以来の市場社会化する都市上海における都市ツーリストの形成およびその特徴については、上海市民の観光意識および観光行動に関する数量的調査を行い、そのデータおよび分析に関してはすでに東美晴がいくつかの報告および論文⁽⁵⁾を発表して

いるのでここでは多くを触れることはしない。東の分析よれば、急激に進む上海市民の階層化、階層格差の拡大にともって観光意識や観光行動にも新たな傾向や格差が生じている。上海から高速道路や一般道を使って2時間程度で出かけることのできる周荘は、今や手軽な日帰り観光地となっており、自家用車ばかりでなく格安のバスツアーも数多く出ていて、家族連れや老人グループの手ごろな観光コースとなっている。逆に若者層で、現代的な産業の担い手である都市の成功者たちにとっては物足りなさを感じつつあるようだ。彼らはさらに遠方の雲南省や海南島の観光地や新たに開発されたリゾート地に向っているのである。

江南は宋代以来長い期間にわたって中国で最も発展し、伝統的な中国の文化や豊かさの象徴であった地域であり、その古鎮は古きよき中国を思い出させてくれるノスタルジア観光のメッカとなっている。

観光ブームはツーリストの創出と、その願望に対応した観光地とがあいまって実現したことを意味している。ツーリストの気にならぬ旅行地や観光では、政府が強力に推進しようとしてもブームにまではなりはしない。中央や地方の指導者や政府が推進しようとした紅色観光はとくにブームを巻き起こすほどにはならなかった。

J.アーリも、ツーリストの移動や旅行の動機や願望が、人びとの移動や流動、フローに対してどのようなかわりをもっているかについて研究することを提案している⁽⁶⁾。

アーリは、移動はおもに水平的なものとしてとらえており、従来の社会学が主なテーマとしてきた垂直的な移動との違いを主張する。

人びとの移動の動機や願望が、移動や流動・フローに対してどのような関わりをもっているかについて焦点を当て、研究することが提案されている。ここで願望の研究課題としては、仕事・居住・余暇・宗教・家族関係・犯罪の増加・政治的亡命などと結びついている願望である。こうした人びとの移動に関わる願望や動機が、水平的な移動とどのような結びつき、関係があるのかについての研究が主要課題であるというのだ。

なぜなら、これまでの社会移動に関する研究の多くは、社会を画一的な平面とみなしてきたので、階級・ジェンダー・エスニシティといった社会的カテゴリーと地域・都市・場所といった地理的なものとの重なり合いを損なってきたのであり、両者別々、無関係に研究されてきたからである。だからこそ、移動を社会的な現象であるとともに地理的な現象であるとしてとらえていく社会学が必要になるのである。

アーリにしたがって移動の社会学を構想するとすれば、社会的カテゴリー研究と地理的カテゴリー研究との間の重なり、関係性を研究することから始まることにある。観光旅行という地理的移動の研究は、階級やジェンダーといった社会的カテゴリーによる旅行移動に関する願望や動機から出発することになるだろう。すなわち、旅行者たちがいかなる動機や願いをもって観光に出かけるのか、それはいかなる背景の下で発生するのかについての分析からの出発であり、その実現である水平移動としての観光旅行について

分析が続かなければなるまい。

アーリに即して問題設定するとすれば、現代中国都市住民の観光移動に関していかなる願望・意識があるのか、そしてそれに対応したどのような観光が実現しているのかということになる。現代の観光旅行がどのような人びとによる、どのような動機・願望を持った行動なのかについて考察しよう。現代人とはなにか、いかなる願望や動機をもって旅行という地理的水平移動に赴くのか。

旅行者あるいはツーリストとはどのような人びとであるかについて、マッキヤネルは次のように述べている。

ツーリストという言葉は本書では2つのことを表す。ひとつは具体的に行動するツーリスト、すなわち見物する人、観光者でおもに中産階級の人びとである。私はこの集団を社会学的に研究しようと考えている。ツーリストは現実的な人びとであり、実際的な人びとはツーリストである。同時に、第2の意味で、メタ社会学的な語を用いていえば、ツーリストは「現代人一般」の最適なモデルということもできよう。われわれの現代文明にかんする最初の理解は、ツーリストの考え方のなかに出現するのである。私は、第2の意味における「ツーリスト」にも等しく関心を持っている⁽⁷⁾。

ツーリストはおもに中産階級の人びとであり、現代人一般ということになる。現代中国に即して言えば、1980年代よりすすめられている社会主義計画経済から「社会主義市場経済」への構造転換にともなう経済発展、および人口移動の禁止・制御政策からそれを容認し、促進する政策への方針転換のなかで発生している都市化というような大きな社会変動を背景として出現した都市住民が観光ブームの担い手であり、ツーリストであると考えられる。

1990年代以来中国の都市住民、ツーリストの観光旅行に向かう願望や動機はノスタルジアとして理解できるのではないか。そして観光ブームの観光地となった江南古鎮や雲南の麗江は、まさにノスタルジアの対象として見ることができる。ではノスタルジアとはいかなるものかについて整理してみよう。

カプランはノスタルジアを、幼児体験につながる通常のノスタルジアと帝国主義的ノスタルジア2種類に分類しているが、両者は表裏一体となっている。ノスタルジアは一見、罪もないと思われる感情であるが、その奥には攻撃的な衝動が潜んでいるという。すなわち、帝国主義的ノスタルジアの中軸には逆説が存在している。その逆説とは、ある人間が誰かを殺しておきながら、その犠牲者への哀悼に沈んでいるといった状況と似ている。ノスタルジアを感じる人びとは、生活形態を意図的に改変しておきながら、この変更以前のままの事態がとどまっていなかったことを惜しんでいるのである。みずからの環境を破壊しておきながら、自然を尊ぶ人びとの姿にも通じる状況ということができる。

さらにまた、被征服者や滅亡した者たちは、勝利者によって讃美されるのもまた同様な逆説といえる。) 近代人たちが「自然さ」にこだわる気持ち、真正さに対するノスタルジアや探求心についてみても、単に破壊された文化や過ぎ去った時代の遺物に対する、害はないけれども幾分退嬰的な、軽い気持ちで抱き続ける執着心であるというだけではすまない。それは、モダニティを構成する要素としての征服心でもあり、統一を図る意識の土台でもあるのだ⁽⁸⁾。

次に、ノスタルジア出現の社会的背景に注目してみよう。

なぜノスタルジアが発生するのかについてカプランは、不満・不安・失望の時代に発生するとしている⁽⁹⁾。現代の都市社会は便利で豊かな生活を実現していながら、そのなかで都市住民はその代償になにか大切なものを喪失したのではないかと不安におちいっている。市場経済にもとづく都市社会では経済格差が発生し、成功した者も失敗した者もそれぞれ不安や不満を感じており、そんななかでノスタルジアは都市住民の共同の意識となっているというわけである。また経済秩序自体がノスタルジアおよびノスタルジア観光の社会的背景ということもできる。中心に住む都市住民のノスタルジア観光の対象が辺境だからである。

発展の不均衡によって、必然的に格差を生みあちこちに辺境を形成している。ツーリストは、この辺境を構成するとともに、辺境をつくりだしたり、再生したりするにも加担する。「周辺」「中心」をつくらざるをえない経済的、社会的秩序があり、ツーリストは「第1世界」「第3世界」、「先進国」「後進国」、「中心都市」「辺境」といった構築物からなる社会現象を、確証し公認するのである⁽¹⁰⁾。

ノスタルジアは、過去のもの、消えゆくもの、失われたものを理想文化としてとらえている。モダニティは、モダンでないもの、モダン以前のものとの対比で、認可され、規定されることになるが、その過程で「消えゆくもの」「失われたもの」を素朴な経験として理想化するのである。その中で、ツーリストは豊かな国のモダンな人びとであり、彼らが欲しているのは、普通とは異なるものを見たり、感じたりするため、目新しい経験や場所を必要としている⁽¹¹⁾。

ツーリストのノスタルジアにかられた旅行は中心と辺境を往復し、現存する秩序を公認し強化するたびでもあるのだ。現代中国の観光を研究する視点としてノスタルジアを設定する意義はここにある。

注

- (1) 根橋正一「中国における観光学教育の現状」『日本観光学会 研究報告』第29号、日本観光学会、78-79ページ
- (2) 調査に参加したのは東美晴・朱思琳・呉軍・徐安琪・根橋正一である。
- (3) 調査に参加した学生は井上寛・朴元正・蔣大磊・任東明・焦媛・盧明寿・金恵玉・鄭在

根・姜恩珠である。

- (4) 呉軍「中国江蘇省周莊郷の経済発展過程における観光と商業」『科研成果報告書：グローバル化時代のアジア諸地域における観光文化に関する包括的研究』2006年
- (5) 東美晴「上海市民の旅行消費とライフスタイルに関する調査報告」『流通経済大学社会学部論叢』第16巻第1号, 2005年, 東美晴「中国における社会階層と観光—上海市民の選好性の分析から—」『流通経済大学社会学部論叢』第16巻第2号, 2006年
- (6) Urry, John, “*Sociology beyond Society: Mobilities for the twenty-first Century*” Taylor & Francis Books, London, = 吉原直樹監訳, 2006, 『社会を越える社会学—移動・環境・シチズンシップ』法政大学出版局, 1章
- (7) MacCannell, D., 1999, “*The Tourist: A New Theory of the Leisure Class*” University of California Press, p.1
- (8) Kaplan, Caren 1996 “*Questions of Travel: Postmodern Discourses of Displacement*” Duke University Press = 村山淳彦訳 2003 『移動の時代—旅からディアスポラへ』未来社, 75-75ページ
- (9) 同上書：195ページ
- (10) 同上書：115ページ
- (11) 同上書：116-117ページ